

言語文化研究の方法と課題（2）

斎藤武生

神田外語大学

ここでいう「言語文化」とは言語表現の意である。このことを確認した上で、本稿では、言語表現に映し出される文化の問題に取り組んでいる NSM 理論に注目した。この理論を取り上げることは、オーストラリアで活躍する言語学者 Wierzbicka のほぼ 30 年の研究歴を追うことにもなるが、言語文化研究とのかかわりは近年特に強くなりつつあるように見える。もともと言語形式の意味論を主たる関心事とする NSM 理論は、自然言語の意味を自然言語で語ろうとするときに陥りかねない循環論をいかにして避けるかに焦点を当て、生得的かつ普遍的な意味の基本要素の確定に長い時間をかけてきた。本稿では、そうした過程で派生的に生じたとされる近年のカルチュラル・スクリプト理論に特に注目した。それとはまた少し違った形で、言語の文化論が NSM 理論の延長線上で展開されていることにも注目した。その例として、Travis(1998)の「思いやり」をキーワードとする日本文化論を取り上げたが、その研究は単なる「文化論」ではなく、むしろ経験科学としての「言語文化研究」の一つのあり方を示したものとする評価を本稿では与えた。最後に、NSM 意味理論が抱えるいくつかの問題点を指摘した。

1. 「言語文化」の考え方

本稿でいう「言語文化」とは言語表現(linguistic expressions)の意である。このことは斎藤(2002)ですでに指摘したが、その場合の言語表現とは、生成文法でいう I-言語(internalized language)によって生成されるものを指している、ということも述べた。つまり、一定の経験をへて安定状態を獲得した言語能力(faculty of language: FL)が生み出す言語表現を「言語文化」の名で呼んだことになる。経験の違いから、人間はそれぞれ自分の生まれ育った社会の特定言

語、すなわち、I-言語を脳内に獲得することになるが、その I-言語が生成(generate)する無限の言語表現（つまり、言語文化）もまた表示として脳内に実在することになる。この言語表現が運用システム(performance systems)を経由してはじめて「表れ(manifestations)としての言語表現」、言い換えるなら「現象(phenomena)としての言語文化」を生み出すことになる。

現象としての言語文化は観察を許すが、脳内に実在する言語文化そのものは観察することができない。言語文化研究はそうした観察できない言語文化そのものを主たる研究対象とするが、その場合、議論の証拠として研究の手がかりを提供してくれるのが観察可能な言語文化現象である。現象としての言語文化は単に言語文化の本体に対して手がかりを与えるだけでなく、それ自体がことばの文化遺産として興味ある研究対象にもなる。とりわけ、文献学的な言語文化研究とか通時的な言語文化研究をめざす場合には重要な位置づけを与えられることになる。

言語文化の科学的研究は言語文化学とか文化言語学の名のもとで進めることが期待されるが、すでにある学問分野との関係でそう簡単にいく作業ではない。近年の認知言語学(cognitive linguistics)が取り組んでいる問題と重なる部分があるのは間違いないが、今のところ認知言語学そのものの守備範囲が定かではなく、その中に言語文化研究を位置づけることはできない (Lee[2001]参照)。しかし、必要な方法論とか研究の成果をそうした先行する研究分野から学ぶことは望ましいことである。ここでは、認知意味論、さらに言うなら認知言語学の一部に位置づけられる NSM 理論を取り上げることにしたい。¹

¹ NSM 理論を認知言語学とみる議論については Wierzbicka & Harkins (2001:20)を参照。

2. NSM理論について

NSM (Natural Semantic Metalanguage)理論は、ヨーロッパで 1960年代中頃から始まったものといわれるが、それを世界的な意味の理論にまで発展させたのは、オーストラリアで活躍するポーランド生まれの言語学者 Anna Wierzbicka である。1972 年に出版された彼女の著書が出発点になっている。その後 Goddard & Wierzbicka(1994)を境に、思弁的な主張から経験的な研究課題への取り組みが本格化し、Wierzbicka 自身が発表する研究成果の量もすでに膨大なものになっている。

Chomsky がデカルト派言語学として自分の主張する生成文法を科学哲学史のなかにきちんと位置づけたのに対し、Wierzbicka が注目したのは同じ 17 世紀のライプニッツである。特に、生得的な「人間の思考のアルファベット (alphabet of human thoughts)」という考え方に注目し、人間の思考には生得的で、普遍的な「人間の考え方(human concepts)」が存在すると仮定し、それを「意味の基本要素(semantic primitives/primes)」と呼んだのである。² この基本要素を表現するのに彼女が主張したのは自然言語をメタ言語として利用することで、1972 年の段階では *I, you, someone, something, this, want, don't want, think, imagine, feel, part, world, say, become* の 14 語が基本要素として提案された。これらの語の表す概念は生得的かつ普遍的なものと考えられ、どの言語にもこれらの英語で示した原始概念に対応する表現は存在すると想定している。その後、試行錯誤を繰り返しながら、NSMの決定作業を進め、たとえば、1992 年の段階では、先の 14 語のうち、*imagine, part, world, become* は不適切であったとして捨てられ、代わって *know, where, good* が加わり、

² 彼女にとって、言語学とは意味の学問であり、意味を伝える仕組みの統合体としての言語の研究分野には語彙意味論(Lexical semantics)、文法意味論 (Grammatical Semantics)、

when, can, like, the same, kind of, after, do, happen, bad, all, because, if, two といった語が検討段階にあったことが報告されている (Wierzbicka[1992]参照)。現在では 60 前後の意味の基本要素が発見され、かなり体系的に配列されるまでになっている。³ こうした決定作業は経験的な作業として行われるもので、これまで「緊急の課題」の名の下で精力的に行われてきたが、最終的にどれだけの数に落ち着くかは不明である。Wierzbicka(1996)は 100 よりは 50 に近い方のいくつかという数の見通しを語っている。また、最近、いずれにしても、この十年位の間にはすべての意味の基本要素が確定する、という見方が提出されている (Goddard [2002c]参照)。

論理記号などは使わず、自然言語をメタ言語として使うことで自然言語の意味論を展開しようとするところから Natural Semantic Metalanguage、つまり NSM の呼び名があるが、この原始概念を表す意味の基本要素は別のものによっては定義できないもの (indefinables) である。これらの「定義できない要素」は自然言語の共通の核 (common core) を構成するもので、自然言語から彫り出されたものと考えるところが、この NSM アプローチの大きな特色となっている ([Wierzbicka 1996]参照)。NSM を仮定する理由は、言うまでもなく、循環論を避けるねらいがあるからである。

発話内意味論 (Illocutionary Semantics) の 3 分野があるとしたのが Wierzbicka (1988) である。

³ 普遍的な意味の基本要素 (universal semantic primes) についての最近の成果は Wierzbicka (2002a) や Goddard (2002c) で知ることができるが、ここでは、後者の論文から引用して示す。

Substantives (I, YOU, SOMEONE, PEOPLE, SOMETHING/THING, BODY);
Determiners (THIS, THE SAME, OTHER); Quantifiers (ONE, TWO, SOME, ALL, MUCH/MANY); Evaluators (GOOD, BAD); Descriptors (BIG, SMALL); Mental Predicates (THINK, KNOW, WANT, FEEL, SEE, HEAR); Speech (SAY, WORDS, TRUE); Actions, events, and movement (DO, HAPPEN, MOVE); Existence and possession (THERE IS, HAVE); Life and Death (LIVE, DIE); Time (WHEN/TIME, NOW, BEFORE, AFTER, A LONG TIME, A SHORT TIME, FOR SOMETIME); Space (WHERE/PLACE, HERE, ABOVE, BELOW, FAR, NEAR, SIDE, INSIDE); Logical concepts (NOT, MAYBE, CAN, BECAUSE, IF); Intensifier, augmentor (VERY, MORE); Taxonomy, partonomy (KIND OF, PART OF); Similarity (LIKE)

語彙意味論から文法の意味論(the semantics of grammar)へと研究は拡大してきている。文法意味論はNSMを構成する要素を組み合わせ、統語構文(syntactic constructions)の意味を定義していこうとするもので、ある特定言語に固有とみえる文法構文のパターンにも普遍的な共通のコアが存在すると想定した上での研究である。ことばを換えていうなら、生得的かつ普遍的な「人間の思考のレキシコン (lexicon of human thoughts)」に加え、「人間の思考のシンタクス (syntax of human thoughts)」といったものが存在するという主張である。すでに取り上げられている構文には使役構文、受身構文などいろいろあるが、たとえば、使役構文については、なぜ英語に使役構文が多いのかという問いを発することによって、使役構文に映し出される英語圏の文化の問題を民族統語論(ethnosyntax)の形で扱うという発展もみられる。Wierzbicka (2002a)はその研究例で、個人の自立(personal autonomy)を強く要求するアメリカ人は命令(orders; commands)を嫌うが、一方で指導(directions; instructions)には進んで従う傾向があることを指摘した上で、その傾向が英語の使役構文の多様性に関係しているという議論を展開している。⁴

3. NSM 理論と言語文化研究

Wierzbicka や Goddard の研究に代表される NSM 意味理論は NSM の確定作業を中心に、この 30 年間に於いて著しい発展をみせたが、そのリサーチ・プログラムの発展を支えた研究者のなかには数人の日本人研究者も含まれている。問題は、こうした研究が言語

⁴ Ethnosyntax (民族統語論) という言い方は Wierzbicka (1979)の造語。Goddard (2002a)の説明によると、狭義には“culture-related semantic content encoded in morphosyntax”を意味し、広義には“a much wider range of phenomena in which grammar and culture may be related”を意味するという。また Enfield(2002)は“the study of connections between the cultural knowledge, attitudes, and practices of speakers, and the morphosyntactic resources they employ in speech”と延べ、広義の解釈を採用している。広義の概念は ethnopragmatics (民族語用論) と重なる面をもっている。

文化研究にどのような関わりをもつかという点である。

この理論の研究者たちがその出発点で問題にしたのは、言語と文化のある面での直接的な関わりを直観しながら、議論に科学的厳密さが欠けるところから真剣な科学研究として扱ってもらえなかったという点である。この問題を解決するために、Wierzbicka は科学的な方法論として NSM アプローチを提案したのであった。すなわち、主観的(subjective)で、随意的(arbitrary)で、経験的な検証をゆるさない従来のやり方に代わって、厳密で直観的に検証可能(verifiable)な方法論として、意味の基本要素の同定、及び基本要素の結合方式(semantic formulae)の確定を急いだのである。ことばを換えていうなら、基本要素の同定作業はいわゆる「実質的な普遍特性(substantive universals)」を求める作業、基本要素の結合方式を探るのは「形式上の普遍特性(formal universals)」を求める作業とみることもできる。

意味の基本要素を探り、その組み合わせ方式に普遍文法を求める NSM の研究プログラムが依って立つ基盤は、言語が意味を伝える統合体であり、その統語構文(syntactic constructions)は特定言語に固有のある種の意味及び思考様式を記号化(embodiment)し、体系化(codify)していると考えるところにある。つまり、この研究を推し進めていけば、ある言語圏において特徴的な考え方(ways of thinking)を知ることができる、という見通しをもっていることになる。

1980 年代の中頃からは、このアプローチを「感情(emotions)」の研究に活用しようとする動きも始まっている。たとえば、interest, anger, disgust, fear, joy, surprise, contempt, sadness, shyness, shame, guilt などを仮に普遍的な「感情の基本要素(fundamental emotions)」とするなら、これらの感情表現に相当する表現は英語以外のすべての言語にも備わっていることになる。ここでの仮定が実際に正しいかどうかは今後の経験的な検証を待たなければならな

いが、こうしたメタ言語の同定によって厳密な記述が可能になることは間違いない。背景にある考え方は、異なる感情用語の体系は異なる仕方での感情の概念化を映しているという見方である。そして、さらに言うなら、「感情の概念(concept of “emotion”)」は文化に縛られている(culture-bound)とする見方である。(Athanasiadou & Tabakowska [1998]; Wierzbicka [1999]参照)

文化の実態について語ろうとする場合、証拠として最善のものは言語である、とする考え方はそう珍しいものではない(たとえば、Wierzbicka & Harkins[2001:52]を参照)。言語文化研究においても、特定の言語圏での考え方・物の見方を語ろうとする場合、言語の証拠(linguistic evidence)は最も信頼できるものとしての位置づけをもつことは疑いない。問題は、文化という言い方でなにを意味するかである。たとえば、国民性とか民族性といったことを意味するとなると、当然のことながら、問題がでてくる。Henrietta & Taylor(1998c)が Wierzbicka を批判したのも、言語の意味論を国民的性格(national character)の問題に直接的に結びつけようとする姿勢であった。直接的な因果関係を求めるとしたら、いきなり「国民性」を持ち出すのではなく、むしろ、その言語圏の話し手たちの(心的)態度、考え方、行動規範などに求めるべきであろう。その際には、当然、こうしたものがその社会の言語の語彙とか統語構文に写し取られているという想定(assumption)が必要になるが、NSM 理論がめざしているのは、まさにそうした想定に立った意味分析であると思われる。語用論的な意味分析も民族語用論(ethnopragmatics)の名で始まっている。また、関連して、通文化的語用論(cross-cultural pragmatics)をテーマにした Wierzbicka (2003)が最近出版されたが、この本の初版は 1991 年に公刊されたもので、時代の強い要請に応じて再販されたという経緯がある。「第 2 版への序文」では初版以来の NSM 理論の発展を語っているが、最近の民族語用論についても言及してい

る。

4. カルチュラル・スクリプトの理論

言語文化研究との関係で考えるなら、Wierzbicka を中心にして進められている NSM リサーチ・プログラムはたしかに興味深いし、重要でもある。しかし、筆者にとってより興味深く思われるのは、NSM 理論そのものよりむしろ、その支流 (offshoot) という形で派生的に登場してきたカルチュラル・スクリプトの理論 (theory of cultural scripts) である。語用論的な意味論への真剣な取り組みが本格化し、文化への志向性が強まったことで、研究者の間で言語を証拠にしたさらに広い文化記述 (cultural description) をめざす動きが本格的化したとみえることは、本稿でいう言語文化研究のあり方に一歩近づいたことを意味していると思えて興味深い。

カルチュラル・スクリプト理論によって文化の記述をめざす動きが表面化したのはごく最近のことで、具体的には、Ramson(2001)への反論として書かれた Wierzbicka(2001)の議論に見ることができる。⁵この反論記事の1年遅れで Wierzbicka(2002b)が公刊されるが、原稿として準備されたのはこの方が先のように、反論記事はこの論文を踏まえてなされている。また、Wierzbicka (2003)の「第2版への序文」でも、カルチュラル・スクリプト理論が NSM 理論から派生的に生じた新しい動きとして語られ、彼女の最近の関心事の一つになっていることが見て取れる。

カルチュラル・スクリプトとはある社会の人たちが共有する基本

⁵ Ramson の批判はかなり感情的なもので、引退するまで Wierzbicka と同じ大学に籍を置いていながら互い会話がなかったということが微妙に関係しているようである。ただ、辞書学者としての立場から行った OED 等の語義の扱いについての批判はそれなりに正当に評価すべきであろう。一方、Wierzbicka が friend という語の語義の変遷を見るのに、過去の書物に「言語の証拠 (linguistic evidence)」を求めて引用例を多用したという点は、言語文化研究の視点から見るとかぎりおもしろいところである。

的な考え方や価値観の集合を意味するもので、そのスクリプトのレパートリーは社会に特有のものと考えられている。Wierzbicka(2001; 2002b)が例として挙げているのはオーストラリア人の場合で、たとえば、“it is bad to be a whinger”（泣き言をいう人は悪い）、“it is bad to be a dobber”（密告者は悪い）、“it is bad to be a sook”（臆病者は悪い）などのスクリプトで、こうした考え方・価値観に基づいてオーストラリア人は行動しているという。多文化主義（multiculturalism）の発想が強まる時代にあって「オーストラリア文化」、「オーストラリア的性格」、「オーストラリア精神」といった言い方をすること、さらにそれを説明するのに「オーストラリア人のカルチュラル・スクリプト(Australian cultural scripts)」といった言い方をもち出すのはたしかに問題であろう。実際、Ramson の批判もこの辺の事情を多少反映したものであったが、Wierzbicka 自身は、こうした事情を十分に承知した上で反論記事を書いたのである。すなわち、彼女に言わせれば、過去2世紀以上にわたるオーストラリア英語を詳しく調べてみれば、一定数の「オーストラリア人のカルチュラル・スクリプト」が存在することは紛れもないかたちで確かめられるはずだ、というのである。

カルチュラル・スクリプトの理論は「文化の特異性」と同時に「文化の普遍性」を想定したリサーチ・プログラムである。検証可能な方法論を主張することで拡大の歴史を歩んできた NSM 理論が、究極的に「文化の規範・態度(cultural norms and attitudes)」の厳密な議論を将来提供することになるのかどうか、今の段階では明らかではない。

5. 文化のキーワード

カルチュラル・スクリプトの理論とは別に、本流を行く NSM 理論に則った形での文化記述をめざす動きもすでに始まっている。文

化のキーワードの分析によってその文化圏のありようを探る動きで、Wierzbicka(1997)が代表的な研究例である。たとえば、英語の friend という語は NSM には含まれない語で、英語圏に特有な概念を内包していると考えられる。換言すれば、friend は決して普遍的な概念を映す語ではないということである。こうした理解の上で、文化のキーワード(key words)としての friend の意味を調べてみれば、その先に「アングロ文化(Anglo culture)」に特有の考え方が見えてくるというのが Wierzbicka の主張である。⁶ 彼女の場合、一義的には、オーストラリアにおけるアングロ文化を問題にしていることは言うまでもない。

具体的に見るなら、英語の friend という語はかつて friendship という概念と結びついて使われていたが、今では意味が弱まり、表現のありようも変わってしまった。このことは社会変化の中での人間関係、さらに言うなら、アングロ文化の変化を映すものだ、という主張である。文化の様態の変化を証拠立てるものとして、英語の表現の変化に多くの頁を割いているが、ここではその一部を見ることにしよう。

- (1) a. true friends
- b. close friends

(1a) と(1b)は似ているようで、実は異なるという。true friends とは古い時代の言い方で、true friendship に支えられて存在することを表現したもので、字義通りの friends そのものを指しているのに対し、(1b)は現代的な言い方で、friends のもつ基本的な意味に「親しさ」が付加されたのが close friends だという。

⁶ こうした主張の背景にあるのは、次のような考え方である。"Language —and in particular, vocabulary — is the best evidence of the reality of "culture," in the sense of a historically transmitted system of "conceptions" and "attitudes." (Wierzbicka [1997: 21])

- (2) a. dear friends
b. enjoyable friends

(2a)は古めかしい言い方で、今日では年輩者が使う程度の表現になっている。古い時代の friend には「~のためによいことをする」の含意があったが、今日の friend にはむしろ「~と共にする」の含意があって、楽しみを共にするような状況を表現する(2b)の言い方のほうが普通だという。friend という語の意味変化は、friend というものの位置づけがアングロ文化圏で変わってきていることを示唆している。

- (3) a. my friend
b. a friend of mine

(3a)は古い時代にはごく普通の言い方であったが、今日では my boyfriend とか my girlfriend の婉曲表現で用いる、といった傾向も見られるようになってきているという。今日普通に用いられるのは(3b)の表現である。この表現は、話し手は個人としての友達には関心がなく、ただ friends という範疇の一員としてしか相手を見ていない、といった姿勢を示唆している。ここから得られる含意は、今日では多くの friends をもつことが期待されているということである。friend と friendship との結び付きが弱くなってきていることも読み取れる。

次の(4)の例もこうした変化を裏づけるものである。

- (4) a. find a friend
b. make friends

(4a)は古い時代にはよく見られた言い方で、単数名詞が用いられている点に注意が必要である。一方、(4b)は表現としても比較的新しく、friends が複数名詞で用いられているところがいかにも現代的

である。また、make という語が用いられたことで、現代の社会にあっては、友達は自らの力で作っていくもの、という考え方が必要なことが示唆されているという。

こうした議論は、言語の証拠によって文化論を展開しようとするもので、言語文化研究のあり方としては興味深いものである。⁷ただし、Ramson(2001)による批判は別にしても、文化論としての深みに欠ける点があることは認めざるをえないであろう。また、Wierzbickaがこの30年間取り組んできたNSM理論による厳密な意味分析という方法論がこの研究では活かされていないと見えるのも問題であろう。

NSM理論を活かした文化記述ということであるなら、むしろ注目すべきはTravis(1998)であると思われる。Travisがその論文で問題としたのは、日本文化のキーワードとしての「思いやり」である。彼女がオーストラリアで調査を実施したのは1992年である。日本人50名、イギリス系オーストラリア人60名を対象にした調査で、これらの被験者に「良い人(good person)」と呼ばれるにふさわしい人間の資質とはどんなものか、それを表す適切な語を10語書くよう指示したのである。すると、日本人の被験者の70%が「思いやり」をそのリストに書き込んだという。因みに一番多かったのは「やさしい」で、2番目は「明るい」、3番目が「思いやり」であったという。一方、イギリス系オーストラリア人がリストに挙げたのは“honest”が1位で全体で70%を占めたという。そして、2位は“intelligent”で50%であったという。「思いやり」に相当するかも

7 ここでの議論には直接関係はないが、メタファー論の立場からアメリカ人の“friendship”を論じた Kövecses(1995)の興味深い研究もある。一般に、概念メタファー(conceptual metaphor)の名で呼ばれるメタファーの議論には興味深いものが多いが、言語文化研究とのかかわりについては改めて考えるべき課題である。最近出た Lakoff & Johnson(2003)は1980年版に“afterword”を追加しただけのものであるが、この追加部分が新たな関心を呼んでいるように見える。

知れない “kind; caring; understanding; thoughtful; considerate” を挙げた人は全体で 20%以下で、“empathic”をリストに書き込んだ人は皆無であったという。

こうした調査結果から Travis は日本文化のキーワードとして「思いやり」を仮定し、その正しい理解に基づいて、日本人の間接的なコミュニケーション・スタイル、グループを支える相互依存性など、日本文化を特徴づける行動様式の解明を意図したのである。NSM理論によって、Travis は「思いやりがある」の意味を次のように定義している。

- (5) X has *omoiyari* (X-wa *omoiyari ga aru*)
- a. X often thinks something like this of people:
 - b. I think I can know what this person feels/wants/thinks
 - c. if this person doesn't say it to me
 - d. I can do good things for this person because of this
 - e. because of this, X does something

(5e) から分かることは、日本人の「思いやり」は行動することを含意するので、ときには「おせっかい」にもなりうるということである。また、(5a)で *people* という言い方をしているのは、「思いやり」は特定の人だけに向けられた性質 (*personal quality*)ではなく、もっと一般的な特徴であると理解したからである。日本人のインフォーマントが提供した判断で、次のような微妙な例が採用されている。

- (6) a. ?*Taroo-wa Hanako-ni omoi-yari-ga aru.*
b. *Ano sensei-wa gakusei-ni omoi-yari-ga aru.*

「思いやり」をこのように定義したあと、この概念が日本社会で重要視されるという事実から判断して、日本人にとっての理想的な

相互関係 (interaction) とは、相手がなにも言わなくてもその人が望んでいることを知り、それを相手に提供するようなかたちのものであろうと Travis は結論づけている。⁸

6. いくつかの問題点

Wierzbicka の NSM 理論が登場してからすでに 30 年が経過したが、その間、多くの時間が NSM を構成する意味の基本要素の同定作業に当てられてきた。厳密な方法論の確立をめざしたこの作業の本来のねらいは、その方法論を駆使して語、句、文などの言語形式に隠された「心的態度」を通言語的(cross-linguistically)に明らかにすることであったかと思われる。予想外に基礎作業に時間をとられたという事情は認めざるをえないであろうが、今日は、緊急の課題として取り組んできた意味の基本要素の確立にもようやく見通しがついたという段階までできていることは確かである。本来のねらいをどのようにして実現していくかが今後の大きな課題ということになる。

NSM 理論の拡大・発展の歴史を眺めていると、その過程で、他の言語学分野から都合のよい部分だけ取り込むという事例がかなり多かったように思えてくる。そのためもあってか、理論の全体像がはっきり見えてこないという印象が強い。また、理論的に無理が生じているという場合もありそうで、たとえば、意味の基本要素を生得的、かつ普遍的とみる見方を当然のこととして作業を進めてきているが、これなどは初期の生成文法の議論の影響下で考えられたも

⁸ Travis(1998)は「思いやり」と対照的なものとして、アングロ文化圏の“empathy”を取り上げ、NSM 理論による定義を試みているが、興味深いのは、いやな体験をした相手に対して、その人が感じているものを理解することができるという「能力(ability)」を含意するだけで、行動を含意することはない、という点である。このことが、相手の自立 (autonomy) を尊重しようとするアングロ社会のあり方にもつながってくることになる。

のと思われるだけに、改めて問題にすべき点を含んでいるであろう。生成文法の場合は言語習得論の裏付けがあり、言語研究の意義 (linguistic significance) も母語の言語習得を説明する、ということによって得られるので特別な問題はない。しかし NSM 理論にはそうした理論的支えが特にあるとは思われないだけに、基本的な意味要素の確定作業に必然性(nonarbitrariness)を期待するのは難しい。類型論的な議論で終わる可能性も否定できないであろう。

期待できるのは、NSM 理論から派生的に生じたといわれる近年のカルチュラル・スクリプト理論である。人間の文化的な営みには、その社会に共通の「台本」のようなものがあって、多様な生活が営まれているという見方はそれなりに興味深い。ただし、そうした観点にたつ研究は、言語文化論というより、むしろ、文化論そのものとみるのが妥当であろう。

言語文化論としてより興味深いのは Travis (1998)の「思いやり」の分析例である。NSM 理論による記述も効果的であると思われる。この種の研究は厳密な科学としての言語文化研究のあり方に一つの例を提供してくれるものである。

NSM 理論に基づく最近の研究に興味深い文化研究の具体例があることをみてきたが、ただ気になるのは、言語表現そのものを文化遺産として受け止める姿勢に欠けていると思われる点である。言語文化研究の立場からするなら、現象としての言語表現を言語文化遺産とみる視点はときには必要にして不可欠なものである。また、Wierzbicka の議論で欠けているのは、共時的 (synchronic)、通時的 (diachronic)な視点を明確に区別するという姿勢であろう。たとえば、前節でみた friend の議論がすでにそうであった。文化のキーワードという発想を捨て、日常の言語表現に隠された物の見方・考え方を問題にしようとする場合であるなら、たとえば、共時的視点にかぎった体系的な言語表現の扱いも可能であろう。

参考文献

- Athanasiadou, Angeliki & Elzbieta Tabakowska, eds. 1998. *Speaking of Emotions: Conceptualisation and Expression*. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- Enfield, N.J. (ed.) 2002. *Ethnosyntax: Explorations in Grammar and Culture*. Oxford: Oxford University Press.
- Goddard, Cliff. 1994. Semantic theory and semantic universals. In Cliff Goddard & Anna Wierzbicka, eds. (1994), 7-29.
- Goddard, Cliff. 1997. The universal syntax of semantic primitives. *Language Sciences* 19, 197-207.
- Goddard, Cliff. 1998. Bad arguments against semantic primitives. *Theoretical Linguistics* 24, 129-156.
- Goddard, Cliff. 2002a. Ethnosyntax, ethnopragmatics, sign-functions, and culture. In N.J. Enfield, ed. (2002), 52-73.
- Goddard, Cliff. 2002b. The search for the shared semantic core of all languages. In Cliff Goddard & Anna Wierzbicka, eds. (2002a), 5-40.
- Goddard, Cliff. 2002c. The on-going development of the NSM research program. In Cliff Goddard & Anna Wierzbicka, eds. (2002b), 301-321.
- Goddard, Cliff. & Anna Wierzbicka. 1994. Introducing lexical primitives. In Cliff Goddard & Anna Wierzbicka, eds. (1994), 31-54.
- Goddard, Cliff. & Anna Wierzbicka. 2002. Semantic primes and universal grammar. In Cliff Goddard & Anna Wierzbicka, eds. (2002a), 41-86.
- Goddard, Cliff & Anna Wierzbicka, eds. 1994. *Semantic and Lexical Universals: Theory and Empirical Findings*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
- Goddard, Cliff & Anna Wierzbicka, eds. 2002a,b. *Meaning and Universal Grammar: Theory and Empirical Findings*. Vol. I. (2002a), Vol. II (2002b). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Harkins, Jean & Anna Wierzbicka, eds. 2001. *Emotions in Crosslinguistic Perspective (Cognitive Linguistic Research 17)*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Henrietta, Mondry & John Taylor. 1998. The cultural dynamics of "national character": the case of the new Russians. In Angeliki Athanasiadou & Elzbieta Tabakowska, eds. (1998), 29-47.

- Kövecses, Zoltán. 1995. American friendship and the scope of metaphor. *Cognitive Linguistics* 6, 315-346.
- Lakoff, George & Mark Johnson. 2003. *Metaphors We Live By*. Chicago/London: The University of Chicago Press.
- Lee, David. 2001. *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Ramson, W.S. 2001. Anna Wierzbicka and the trivialization of Australian culture. *Australian Journal of Linguistics* 21, 181-194.
- Travis, Catherine. 1998. *Omoiyari* as a core Japanese value: Japanese-style empathy? In A. Athanasiadou & E. Tabakowska, eds. (1998), 55-81.
- Wierzbicka, Anna. 1980. *Lingua Mentalis: The Semantics of Natural Language*. Sydney: Academic Press.
- Wierzbicka, Anna. 1985. *Lexicography and Conceptual Analysis*. Ann Arbor: Karoma.
- Wierzbicka, Anna. 1986a. Does language reflect culture? Evidence from Australian English. *Language in Society*, 15, 349-374.
- Wierzbicka, Anna. 1986b. Human emotions: universal or culture-specific? *American Anthropologist*, 3, 584-594.
- Wierzbicka, Anna. 1988. *The Semantics of Grammar*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Wierzbicka, Anna. 1992. *Semantics, Culture, and Cognition: Universal Human Concepts in Culture Specific Configurations*. New York/Oxford: Oxford University Press.
- Wierzbicka, Anna. 1995. Universal semantic primitives as a basis for lexical semantics. *Folia Linguistica* 29, 149-169.
- Wierzbicka, Anna. 1996. *Semantics: Primes and Universals*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Wierzbicka, Anna. 1997. *Understanding Cultures through Their Key Words: English, Russian, Polish, German, and Japanese*. New York/Oxford: Oxford University Press.
- Wierzbicka, Anna. 1999. *Emotions Across Languages and Cultures: Diversity and Universals*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wierzbicka, Anna. 2001. Australian culture and Australian English: a response to William Ramson. *Australian Journal of Linguistics* 21, 195-214.

- Wierzbicka, Anna. 2002a. "English causative constructions." In N.J. Enfield, ed. (2002), 162-203.
- Wierzbicka, Anna. 2002b. Australian cultural scripts – *bloody* revisited. *Journal of Pragmatics* 34, 1167-1209.
- Wierzbicka, Anna. 2002c. Semantic primes and linguistic typology. In Cliff Goddard & Anna Wierzbicka, eds. (2002b), 257-300.
- Wierzbicka, Anna. 2003. *Cross-Cultural Pragmatics: The Semantics of Human Interaction (Second edition)*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Wierzbicka, Anna & Jean Harkins. 2001. Introduction. In Jean Harkins & Anna Wierzbicka, eds. (2001), 1-34.
- 斎藤武生 2002. 「言語文化研究の方法と課題(1)」 *Scientific Approaches to Language* 1, 173-183.

261-0014

千葉県千葉市美浜区若葉 1 - 4 - 1

神田外語大学

言語科学研究科

saito-t@kanda.kuis.ac.jp